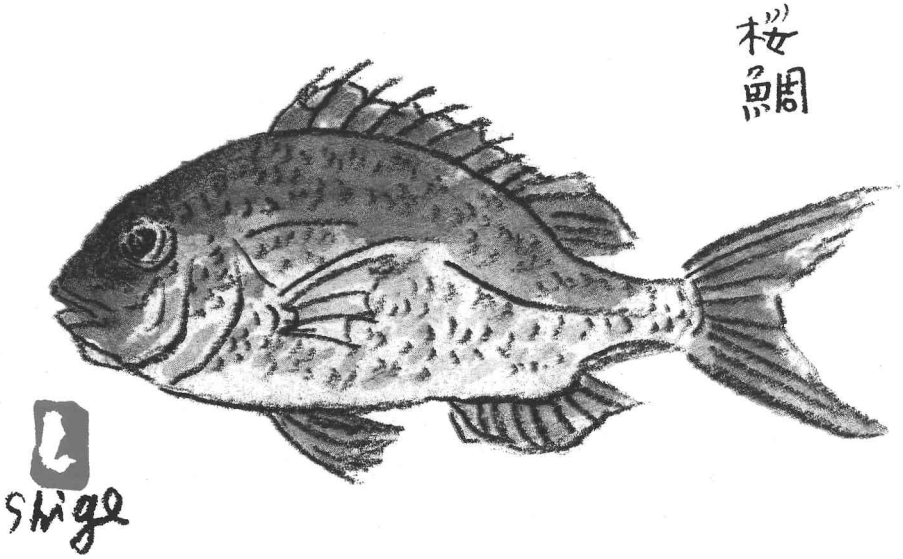
季刊　連句　第4号



季刊連句　第4号　目　次

ウイーンの連句会（南柏雑記２）…… 1

俳諧師の世界像　平井照敏 …… 2

俳諧師　その心と生活　(1)　東　明雅 …… 6

時雨　四吟歌仙　（文）鈴木春山洞 …… 12

初懐紙

朴歯の下駄　捌 杉内徒司　（文）馬場彬風 …… 14

熨斗柳　捌 中島啓世　（文）福井隆秀 …… 15

西湖堤　捌 秋元正江　（文）高瀬美保 …… 16

冬霞　捌 大窪瑞枝　（文）速水昌子 …… 17

「絶頂の城」　付勝練習歌仙　東　明雅 …… 18

春立つ　（連句教室）　東　明雅 …… 19

すり付けとべた付け …… 11

雁帛往来 …… 21　連句会案内 …… 21

表紙　桜鯛（さくらだい）岩満重孝

ウイーンの連句会

南柏雑記 2

ウィーン大学に留学している小沢幸夫君からクリスマスカードが届いた。

お元気でいらっしゃいますでしょうか。先日こちらでグリルパルツアー賞という一種の文化勲章を受けられた日本人の方がいらっしゃり、それを記念して演劇学教授のディートリヒ先生が祝賀会を催されました。その際、日本の口承文学の話から座の文学の話となり、それでは連句などをやってみようということになりました。何分皆門外漢なので出来はめちゃくちゃでしたが楽しい一時を過ごしました。

ウィーンは今クリスマスの準備に忙しい毎日です。市庁舎前の広場には連日市が立ちチョコレートなどを売っています。街角には至る所モミの木が立てられ、夜ともなればイルミネーションがとてもきれいです。

こちらは毎日零下という寒い日が続きますが、柏の方は如何でしょう。風邪など引きませぬよう、よい年をお迎え下さい。

小沢君は信州大学で私が教えた学生である。北海道大学の大学院から、一昨年ウィーンに留学したのだが、ウィーンと言えば私の憧れの都、そこで彼はどんな生活を送っていることだろう。それにしても、日本人が異郷の地で集まって連句を巻いたとはおもしろい。そう言えば、いつか三橋敏雄さんにお逢いした時、終戦直後、三橋さんの俳句仲間が初めて再会して、すぐに始まったのが連句だったというお話を聞いた。異郷の地といい、戦争直後といい、日本人は何か非常の時は、お互の気持を通わせ確め合う唯一の手段として、連句を取り上げるのではあるまいか。ウィーンでの作品がどんなものか知りたいものである。

俳諧師の世界像

平井　照敏

芭蕉の『おくのほそ道』が、旅の実際の記録というよりむしろ、俳諧師の思い描く旅というもののあり方を、実際の旅をもとにしてまとめなおしたものであることは、すでに定説となっているともいえよう。芭蕉は『ほそ道』を執筆しながら、俳諧師ならこういう旅をするだろう、したいものだという形で、思い出の旅の道筋をもう一度たどり、それを組み立てなおしもしたのだった。この見方に立って、『ほそ道』を読んでゆこうとすると、では俳諧師とはどういうものか、どんなふうに考えてゆくものか、ということが、当然問題になってくる。俳諧師は、連句をさばいて諸国を遍歴してあるく者であるから、その考え方の根本には、連句の世界があるわけで、連句の美学、連句の世界観がかれの考えを支配していたことだろう。『ほそ道』が俳諧師の立場で書かれたものだとすると、連句の観点から読んでゆくことは、唯一といってよい読み方であるといえるのではないか。

こういったからといって、『ほそ道』の、芭蕉の句が何句で、曽良たちの句が何句、それが連句の式目に、かなう、かなわない、などということを考えようというのではない。『ほそ道』は、春から秋にかけて、実際の土地を歩いてめぐった道の記の性格のものだから、花の定座、月の定座、恋の座を、きちんと守れるわけのものではない。たしかに表日本から裏日本に旅が移動してゆくのは、連句のオモテ、ウラにあてはまるが、連句のように、一の折、二の折等々があるわけではない。そうした式目の細部ではなしに、もっと基本的なところで、連句的な考え方が、どうあらわれてくるかに、私の関心があるのである。

具体的に考えてみたい。平泉のくだりの後半に、中尊寺の光堂を拝観した記事がある。数字が妙に多い、凝った文体の一節である。

兼て耳驚したる二堂開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、甍を覆て風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

この文章を眺めていると、私は、ごく自然に、このように数字の多い、もう一つのくだりを連想するのである。日光のくだりである。

卯月朔日、御山に詣拝す。往昔、此御山を「二荒山」と書しを、空海大師開基の時、「日光」と改給ふ。千歳未来をさとり給ふにや、今此御光一天にかゝやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穏なり。猶、憚多くて筆をさし置ぬ。

あらたうと青葉若葉の日の光

芭蕉は、敬虔な緊張した文体には、数字を多発して、荘重な味わいを加えようとしたようだが、この二つのくだりを見比べていて、不思議な発見をしたように、改めておどろくのは、結びの二句が、どちらも「光」という同じ文字を含んでいることである。そして、その二句の前文が、何れも数字の多い美文荘重体なのだ。このことを発見したとき、私は急に芭蕉の内面がのぞけたような気がした。芭蕉は、この二つのくだりを、意識して書きわけたのではないかと思った。連句では、同じことばを出来るだけ避けようとする。やむをえぬ場合には、遠くはなして使うのだ。その態度で連句を作る芭蕉が、五十句だけの自句（曽良などの句を加えると全体で六十一句）の二つに同じ光を使っているのだから。

「あらたうと青葉若葉の日の光」は、若々しい、未来のあふれる日光である。だが「五月雨の降のこしてや光堂」の光は、三代の棺を納め、三尊の仏を安置した堂の光であり、過去をつつむ光である。明暗の対照はあまりにもあきらかではないか。そして、前文の中に共通してあらわれる「千歳」という語も、日光では、「千歳未来」と、平泉では、「千歳の記念」と使われているのである。同じ光の語は日光では、まさしく徳川家の光、平泉では、藤原氏の光であり、全盛の盛んな光と滅亡の名残りの光とがくっきりと描きわけられているのだ。「日の光」がやがて「光堂」の光になりかわると芭蕉が考えたものかどうかはわからないが、このように光を対照転調させるところに、俳諧師芭蕉の三十六歩、一歩もあともどりせず、前に進むこころと同時に、またすぐれたバランス感覚をも感じとれるのではないかと思う。

連句でとくに重んぜられるのは花と月である。芭蕉は俳

諧師らしく、『ほそ道』の旅を花ではじめ、月でおえようとした。だが、花に関しては、あまりうまくいったとはいえない。旅立ちの三月二十七日は、陽暦の五月十六日で、花はとうに散っていたからである。それを無理して「上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし」と、ありもせぬ花を咲かせて、江戸を発つ。この無理は、あとあとまで尾をひいて、室の八島で、「木の花さくや姫の神」を出し、武隈で、

「武隈の松みせ申せ遅桜」と、挙白と云もの、餞別したりければ、

桜より松は二木を三月越シ

と、諧謔風に、花の無理押しを弁解する。そしてやっと月山から湯殿山に参る途中で、ミネザクラを見つけて、つじつまのあう思いをあじわっている。「岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋で、春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかほるがごとし。行尊僧正の歌の哀も爰に思ひ出て、猶まさりて覚ゆ」というその文章は、なにかやっと宿願がはたせた喜びに、おぼえず冗舌になったような印象がある。このあともう一個所、象潟で西行ゆかりの桜の老木を見るが、これは花をつけた桜ではない。花については、このように、涙ぐましいまでに苦労して、遅桜のつじつまをあわせるわけである。

桜で苦労したためか、芭蕉の月にたいする意気ごみはさかんなものであった。序章ですでに「松島の月先心にかゝりて」と記し、旅立ちにも「月は在明にて光おさまる物から」と『源氏物語』帚木によって朝立ちの空を描き、塩がまの浦では、「夕月夜幽に」と記したあと、松島に到って「月海にうつりて、昼のながめ又あらたむ」と念願をはたし、やがて出羽三山にのぼる。三山の主峰はもちろん月山だが、この月の山を拝して、芭蕉の旅は最高潮に達するように私には思われる。芭蕉はここで三山詣の行者になって羽黒山から月山、湯殿山にのぼり、また羽黒山に戻っている。そして「サカ迎」をされているのだ。逆迎え、境迎えと書くこの法式は、参拝をおえて下山した行者を料理を携えて出迎えるものだが、その本意は、山上の神仏の世界、死者の世界をへめぐってきた者が、この世に戻ってくるのを出迎える儀式ということだろう。うおーっと叫んで火をとびこえるのだそうである。この行をおえて、芭蕉は、天台止観の月をわがものにすることができた。月山で日月行道の雲関を見、湯殿山で大地の母胎の神秘にふれたおかげである。ここからはじめて月の句がうまれることになる。

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峰幾つ崩て月の山

の二句が出羽三山での月の句だが、芭蕉は、身も心も清浄に、法の月を体得して、山を降り、裏日本の旅に向うのである。

こののち、芭蕉の旅の中心は、月を見事にうたい、有終の美をとげたいというところに集中してゆくようである。

一家に遊女もねたり萩と月
月清し遊行のもてる砂の上
名月や北国日和定なき

これらが裏日本での月の句だが、それぞれに別の月を工夫している。遊女の句は、月と恋を重ねたもの。出羽三山の行がひびいている月と思える。遊行の句は名月前夜の句で、清浄で宗教的なまでの月である。そして、折角の名月は雨の月にしてしまうのだ。何とも屈折した芭蕉の作句心理ではないか。そしてこの変化にも、芭蕉の俳諧師としてのこころがぴんぴんとひびき伝ってくるようである。

連句の世界のもう一つの眼目である恋については、那須野のかさね、佐藤庄司の二人の嫁、紅花の句、合歓の花の句などが思い出されるが、やはりもっとも恋らしい句は、さきにも挙げた遊女の句であろう。この市振の遊女のくだりはフィクションだといわれ、そうだとすれば、芭蕉はこのあたりで恋が必要と見きわめて、このくだりを構想したわけで、これもまた、芭蕉の俳諧的世界観を示すことになる。しかしこの恋は、芭蕉が同行を迫る遊女をふりすてる形のもので、その芭蕉が山中で先行する曽良にとりのこされるくだりの対となるものと考えると、『ほそ道』のはこびの見通しの上からも構想されたことになり、巧妙なさばき手芭蕉の手腕をよく示している。しかも遊女の句の「萩と月」が、曽良の別れの句、「行（ゆき）〳〵てたふれ伏（ふす）とも萩の原」や、敦賀での芭蕉の句、「浪の間や小貝にまじる萩の塵」、また敦賀での芭蕉の月の句の伏線の働きをしていることを見るとき、芭蕉のしたたかな秩序感覚や構想力を痛感するのである。市振の恋の句は、恋の句でありながら、のちのはこびに大きく役立っているのである。

以上、僅かなポイントを探ってみたにすぎないが、これだけでも、『ほそ道』の構想の上に、俳諧師の世界観が大きく作用していることがわかるのではないかと思う。それは、花や月、恋を重んじ、それらを美目として、中心におき、全体の秩序の主軸としてゆく考え方、感じ方なのだ。だが、それによって世界が固定してしまうことをきらい、たえず変化し、前進してゆくことを求めるこころなのだ。『ほそ道』は、連句そのものではないが、連句のそうした精神によって書かれたものである。旅する俳諧師のこころの世界が、実によくあらわれていると思うのである。

著　夏の日　角川書店（絶版）700円
雅　連句入門　中公新書508号　価380円
明　芭蕉の恋句　岩波新書91号　価320円
東猫　蓑　永田書房　価2300円

俳諧師（一）

―その心と生活―

東　明雅

元禄三年（一六九〇）に「人倫訓蒙図彙」という本が出版され、この中に当時のあらゆる職業・階級の人が網羅されているが、その巻二に「俳諧師」という項目があり、挿絵と説明が加えられている。挿絵は羽織を着た男が二人向いあって両吟の俳諧を興行しているところで、二人の男の間には、硯箱と懐紙がおかれ、傍に煙草盆がおかれている。同じ巻に「連歌師」という項目があり、これは立派な座敷に武士が三人で文台の上に懐紙を置いて興行しているのに対して、俳諧師の方は明らかに町人風に描かれ、文台もない。連歌師と俳諧師との社会的評価に画然たる相違があることが、一目瞭然でおもしろい。

説明には「是（俳諧）も連歌と同じく和歌の一体で、古今集にも俳諧歌というものがある。けれども連歌のように、百韻の法式を立てて盛んにひろまったのは逍遥軒（松永）貞徳にはじまった。……近頃、大阪に居住する西山宗因は、元は昌琢の門人として連歌の教えを学んだものであるが、俳諧がすきで一派の風をおこした。その弟子が多く、またその流派も多い」とある。

この本の出版された元禄三年と言えば、芭蕉はその前年に「おくのほそ道」の旅をすませて近江の幻住庵にこもっていた頃であり、西鶴はその前々年に「日本永代蔵」や「武家義理物語」を出版、前年には旅行案内の書である「一目玉鉾」を出版した年であった。この時、芭蕉は四十七才、西鶴は二つ年上で四十九才、ともに俳諧師としての名声はすでに高かったけれども、この「人倫訓蒙図彙」には全くその名が出ていないのも興味がそそられる。

ともかく、この「人倫訓蒙図彙」が言うように、俳諧というものの歴史は古いけれども近世期（一七世紀）に入ってから、㈠国内に戦乱が治まり太平の世になったこと。㈡国内の生産力が発展し、通貨が定められ、交通が自由にな

り、城下町が繁栄し、その他いろいろの政治的・経済的理由から庶民生活が豊かになり、余裕をもつようになったこと。㈢幕府の文治主義によって、官学・私学、また庶民には寺小屋ができ、それまで殆んど文盲だった庶民が読み・書きが出来るようになり、文字という表現能力を身につけた時代の民衆が恰好の遊びとして俳諧にとびついて来た。

「西鶴織留」という本に「時に連歌の掟をゆるやかにして俳諧というものがあらわれたがこれも歌道の一体である。むかしは世の中で隙のある人、あるいは神主、又は武士のもてあそびであったが、近ごろでは世の中に流行すぎて、人の召し使いの下男、下女までもしないものはない位である」と書かれているのは、一七世紀以前まで盛んであった連歌にとって代わって、新しく爆発的な俳諧ブームが起っていたことを語るものである。西鶴も芭蕉も、このような俳諧ブームによって生まれた俳諧師であった。

同じ俳諧師と呼ばれた者の中にも、アマ（遊俳）とプロ（業俳）の区別があったようだが、プロには唯単に俳諧が好きだからと言って簡単になれるものではなく、師匠の門に入って、五年なり十年なり、あるいはそれ以上の歳月を苦労しないと、師匠から許されず、同輩から認めて貰えなかった。その上、世間からも十分評価された人が万句興行（多くの俳諧師が集まり、万句即ち百韻の俳諧を百巻つくってお祝いをする行事）をやって始めて立机を許される。立机とは文台を使って俳諧を捌く宗匠として認められることである。点者というのは、俳諧の作品に批点をつけ、そのことで弟子から金を取ることを認められることである。立机して俳諧師は初めて宗匠とよばれ、点者ともなったのである。それに対し素人で俳諧の上手な人が趣味として俳諧を捌く、これは遊俳であり、この際は文台開きと言って、決して立机とは言わず区別していたのである。

西鶴は十五才の時に俳諧の道に入って、二十一才で点者になったというから、六年目には立机したわけで、これはおそらく異例の早さであり、いかに西鶴が若くて俊敏の才子であったかを証明するものである。

芭蕉は俳諧の道に入ったのが十九才の頃だろうとされるが、三十五才で宗匠立机、尤も彼の場合はいろいろ複雑な事情があるけれども、ほぼ十五・六年かかっている。

このようにプロの俳諧師になるのは大変なことであるけれども、何しろ、近世期三百年という長い期間であるから、その間に存在した業俳・遊俳を含め俳諧師の数はそれこそ夥しいものである。その心と生き方と言ってもそれこそ十人十色であろう。それについて、芭蕉は俳諧と好む人を三等に区分して、次のような手紙を書いている。これは元禄五年二月十八日付で、菅沼曲水という芭蕉が最も信頼した弟子に対して出したものである。

㈠　風雅（俳諧）の道筋は、大体世間に三通りあるようです。点取俳諧にあけくれ熱中して、勝負を争ひ、正しい俳道を見つけず、走りまわっているものがある。彼らは俳諧のうろたえ者に似ているけれども、彼らが居るた

めに、点者の妻子は食べて行くことができ、家賃も払うことができるのであるから、悪い事をするよりはましであろう。

㈡　また、その身は金持であるけれども、人の目に立つような慰みごとは世間に遠慮して、人の陰口いうよりはましだと、日夜俳諧の点をつけてもらい、勝っても別にいばる事もなく、負けても特に怒らず、さあ、もう一巻など又とりかかり、線香が五分燃える間に工夫して仕上げ、それが済んでから、すぐ点をつけておもしろがるなど、まるで子供がカルタを取っているようなものである。けれども料理を調え、お酒を十分に出して貧しい者を助け、宗匠を肥えさせる事、これも俳道の道の助けとなる事であろう。

㈢　また、一生懸命つとめ、心をなぐさめ、しいて他人の批判に拘泥せず、俳の道から実の道へも入るべきものだなど、遠く定家のやり方をまなび、西行の方法をたどり、白楽天の詩をさぐり、杜甫の心の中に入って行くような人は全国でも十人とは居ないでしょう。あなたはこの十人の中に入る人です。よくよく謹んで修行して下さい。

右のように書いている。これは俳諧を学び楽しむ人の品を述べているわけであるが、それはそのまま、それらの人々の相手となる俳諧師の品等をも述べているものであろう。そして、そこに彼らの心と、生き方の一端をかいま見る事ができるのである。

右の三つの品等は、俳諧師の心と生き方に直接ふれるものであるが、私はまた、角度をかえて、俳諧師と切っても切れぬ関係のある旅というものとのかかわりあいの中から、即ち、彼らの中にどのようなものが、どのような旅をしたかという事を探ることによって、この問題に対する答えを出したいと思う。

そもそも、俳諧師は連歌師の亜流である。「連歌の一座に招かれて、宗匠をつとめ、古典を講釈し、あるいは句集や連歌論書、発句を揮毫した短冊を書き与え、その礼物を得て生活の資とすると言った、連歌師とよぶにふさわしい生活の一道が作り上げられて行く」と、島津忠夫氏が「宗祇」の解説の中で書かれた生活のスタイルが、中世から近世になると連歌師から俳諧師へうけつがれることになるが、連歌師の生活が彼らの草庵で行なわれるだけでなく、旅に出る機会が多かったという伝統も俳諧師へ流れこんでいる。それで、まず、連歌師と旅との関係から眺めてみよう。

旅の連歌師として代表的なのは、もちろん宗祇（一四二一－一五〇二）である。芭蕉はこの旅の連歌師宗祇に私淑し、天和二年（一六八二）冬に「世にふるもさらに宗祇の宿りかな」という句を作り、彼はこの句を自分の笠に書きつけて旅をしたという。これは有名な宗祇の発句「世にふるもさらに時雨の宿りかな」という句を踏まえて作られたもので、大体の意味は「この世の中に永らえるものは、わびしい時雨のやどりのようなものである。と宗祇は言って

いるが、自分もこの宗祇の心で、時雨のやどりのこの世を過ごして行こう」というのである。

芭蕉は漂泊の旅を続ける詩人の代表として宗祇を考え、宗祇と同じような旅に出かける自分を想像しながら、右の句を作ったことは明らかである。

芭蕉は宗祇を漂泊のわびしい旅人として頭に描き、これに同感・共鳴しているが、これはさらに溯って、平安時代の西行法師や能因などについても、同じような想像をしている。いわば芭蕉の中世文人に対するイメージの一典型である。しかし、これらが現実の西行なり、宗祇なりと、果して一致するか否か、問題のところである。

宗祇を旅の詩人と見ることは決して誤りではない。彼は連歌師として世に出た四十代以後、ほとんど毎年遠くの国々を歩きまわった。そして文亀二年（一五〇二）八十二歳で二月越後から信濃に出て上野へ赴き、三月は草津で療養、七月に江戸に到着した時は病が一時重くなったが、下旬に駿河に向かい、七月三十日箱根湯本に到着して、その夜半に没したのであった。この間、約三十余年間に、彼は東国へ三度、越後へは八度、美濃・筑紫・若狭へ各一度、周防へ二度の長途の旅行を試み、全く旅行していない年は数えるほどしかなく、本当に旅の詩人というにふさわしい。

だが、よく観察すると、彼の旅行の目的地は、それぞれの土地の豪族の家であり、そこで彼は手厚くもてなされている。なぜ、宗祇が地方の豪族にそれ程尊重されたか。それは当時の都の文化に対する地方人の憧れが強かったからであると言われている。

都で最高の学芸人と認められている宗祇を迎えて古典の講義を聞いたり、連歌を興行したりすることは、地方の豪族にとって光栄であり、その権威を高めるものだったのである。中には、古典や連歌よりも形のある文化財を欲しがる向きもあり、たとえば宗祇と仲のよかった三条西実隆の短冊や色紙などを、宗祇は持参して豪族にわたし、そして、それに対する礼金を実隆に渡して、度々実隆家の経済を支えて来ていたのであった。

このように見てくると、宗祇の旅は漂泊には違いないものの、芭蕉が想像しているように、いつも時雨に降られる悲哀にみちたものとは、大分異った趣のものであったことが知られる。

そして、この旅の先々で彼は莫大な数の句をよみ、連歌を興行し、句集を編集している。彼の連歌がこの旅によって磨かれて行ったことも事実であった。このような旅を金子兜太氏は「定住漂泊者の自己屹立の旅」と呼んでおられるが、私はこれを漂泊の精神と行脚（芸道精進の意志をもった旅）の精神の融合したものであると思う。

さらに時代を遡れば、平安時代の漂泊の歌人として有名な能因法師、「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」、という名歌を残し、芭蕉もその名を慕って、「おくのほそ道」の中でいろいろの場面にその名を登場させているが、この能因の陸奥遍歴は当時の重要産物であった馬の取引のためであったという説が近頃出され、その実証

からある程度納得されている段階である。とすれば、能因の漂泊も、ただ単なる佗人の漂泊・放浪というよりも、実利的要素の濃いものだったと言わざるを得ない。

西行法師は芭蕉が最も私淑した漂泊の歌人であるが、彼の二度の陸奥下りも、純粋な歌心、歌枕を訪ねる風雅一途のものというよりは、彼の属した佐藤一族、あるいは奥州の藤原氏の関係による、他の重要な目的があったと指摘されている。

このように、旅と生活とが密接に結びついているのは、連歌師の宗祇などから急に始まったものではなく、能因・西行などにすでにその原型を見るところで、この伝統が俳諧師に流れて来たのは、むしろ当然のことだったと思う。

しかしながら、西行・宗祇の時代は、歌人・連歌師は旅をしなければその生活が保障できないような乱世であったことも、考えなければならない。元和偃武以来、太平の世になると、すぐれた俳諧師は必ずしも旅をしなくても、立派に生活して行くことができた。たとえば俳諧の祖といわれる松永貞徳（一五七一～一六五三）は殆んど旅に出たことがなかったが、京都の三条衣の棚に住み、五つの別荘をもつ裕福な暮らしをしている。

桃花を手折る貞徳の富　（冬の日）

これは近世以来、俳諧の享受相が庶民階級（というよりは富裕な町人階級）に変化し、この庶民は近世都市（京都・堺・大阪など）に住んでいたために、地方に行って豪族に寄生する必要がなくなったのが第一の原因であろう。

俳諧師は実力があり、有名になれば、点者として、家にありながら、弟子を集め、俳諧の捌・点料・指毫その他で生活に十分な資金を得ることができた。そして、実力のない無名の者は、地方の有力な俳諧愛好者をめざして漂泊の生活をすることになったのである。だから、俳諧師はまず研鑽・修業して実力をつけ、人に知られなければならない。その実力をつけるのに旅が利用された。このような性格をもった漂泊の旅を私は行脚的漂泊と名づける。

行脚とはもともと僧が修行や布教のため諸国をめぐることを言う。それだけに意志的な意欲的なものがあって、単なる遊山ではない。金子氏の言われる「自己屹立」の旅とも見てよいだろう。そして、実際にはどのようにしてこの行脚が行なわれたか、私の師匠根津芦丈翁が書き残された文章（孛日記所収）があるので、以下、そのあらすじを述べて見よう。

現在は文音で他人と連句をする人はあるが行脚する人はない。文音では修業にはならない。第一、一巻満尾するに凡そ半年もかかる。従って楽しみも薄く、熟達した人同士でない限りよい巻はできない。

やはり、連句は膝つき合わせでやるに越すものはない。普通話し話し付け進んでも七・八時間あれば満尾する。早い人同士なら四時間位で一巻満尾する。又、五人十人の出勝でやれば捌者次第で三時間か四時間で満尾できる。

又、初めての初心者でも手引きする人が制約なども教

えながら付け運べば一日に半歌仙位はできる。斯うした正しい段階を一段一段と踏んで行くのが尤もよろしい。

連句は十巻（歌仙）で一ト稽古、百巻巻いてやや明かるみに出づと云われている。百巻満尾するには普通十年はかかる。

この間、師匠の家などで行脚の人に逢う事もあり、相当の人であれば師の紹介で両吟などする機会もある。又、自分の家へまわしてくれるなどの事もあって、旅の様子などを聞いて、自分も行脚して見ようとの気分にもなって、師に頼んで行脚の許しを受ける。普通西か東か日本の半分位である。どこの国で誰、どこで誰と名の知れている人々へ添書を書いてくれる。

此外に一通、国々の御風土様という何処へでも通用する添書だけで、金銭は持たせず艱難して来よの一言が餞けである。

（以下次号）

すり付けとべた付け

連句用語には、一見よく似ていて全く異るものがある。標題のすり付けとべた付けもその一つだろう。

すり付けとは、前句と同種・同様のものを付句で付けることを言う。たとえば、前句に動物があった時、付句にもまた動物を出すなど、

うれしげに啼る雲雀ちりちりと　芭蕉
　真昼の馬の眠た顔也　　野水

雲雀も馬も動物（生類）だが、これは句数の式目ではっきり二句続けてよいことになっている。生類の外、降物・聳物・人倫・芸能・食物・衣類・名所・国名・植物・異時分などが二句続くことを許され、神祇・釈教・旅・述懐・夜分・山類・水辺・居所などになると三句続いてよいことになっていた。しかし、たとえば神様や仏様などを三句も続けることは、式目では許されても、作品としては如何であろう。これらも、まあ二句位までにとどめるのがよいと思われる。

一方、べた付けとは、前句の事柄や言葉にすがって付けられた付句である。親句・疎句という言葉が連歌の時代からあって、その親句にあたるものである。前句と付句との間が近いと、その間に読者の自由な想像の入る余地がすくないために、概しておもしろくない。先師芦丈翁は「根を切れ」とか「その続きを言うな」とか言って前句から離れた付け方を常に求められていた。

しかし、この放れて付けると言っても、その程度が全く難しい。「俳諧は茄子漬の如し、つき過ぎれば酢し、つかざれば生なり、つくとつかざる処に味あり」とも言っておられるが、これこそ連句をやる人が何年かかかって肌で覚えなければならないところである。また、べた付だから絶対に悪いとは言えないし、一巻に一ケ所ぐらいは許されてもよいではないかと思うのは、近頃、離れすぎて分らぬ連句作品があまりにも多いからであろう。

時雨　四吟歌仙

時雨るるや時雨や真行革の石畳　春人
　夜咄更けてあつあつの粥　時彦
川千鳥鳴く音も寒く聞きなして　明雅
　広々と野のひろがりにけり　春山洞
てのひらに月の光の降り来るよ　彦
　新酒携へ訪ね来りし　人
ウ勝ちぬきの角力のまはし美しく　洞
　少年少女背丈すらりと　雅
後朝の闇の黒髪身まとひて　人
　アラーの神よ爆弾はいや　彦
不治といふ恙もなだめなだめつつ　雅
　月の端居に送るそよ風　洞
糠漬に裏の畠の瓜なすび　彦
　奥の細道とびとびの旅　人
足早にぬける門前町となり　洞
　烏天狗も木葉天狗も　雅
枝もせに花たわわなりうづ桜　人
　音楽は今春の祭典　彦

鈴木春山洞

本誌創刊以来、誌上に展開された明雅先生時彦先生の現代連句についての明快・華麗なる論説は、現代連句の未来を示唆し形成してゆくに資するものであると思う。不言実行という言葉は大切であるが、明快なる論説が先行して、これを裏付ける素晴しい実践が伴うことは、より大切であり、現代的文芸としての形態上ゆるがせに出来ないことである。

私達の現代連句も史的必然性のもと遅蒔きながら、ここにこの過程を歩み始めたのである。昭和五八年一一月上旬、東西を電話で結んで座組が行われた。時彦・明雅・春人の三先生は有名・手練れの方々であり、高い水準の昨品の成立が期待された。そこへ敢えて春山洞を加えられた。どうなろうことか。さて一一月一八日、東京・俳句文学館に相前後し

原稿(ナオ)の桝をうめつつ目借時　雅彦
いやな野郎が欠伸してをり　人洞
三の酉まである年よ凩す　彦雅
インフルエンザはやる此の頃　洞人
もうすこしこはがらないでそばに来て　雅洞
バスト九〇ウエスト九〇　人洞
下町の玉三郎と声きかせ　雅洞
夕顔棚にさっと夕立　人雅
残業の焔小さくかき立てて　洞彦
何に駭くおかまこほろぎ　人雅
鹿の声月中天にかかりけり　洞彦
白鳳の世の双塔の影　彦雅
しみじみ(ナウ)と年はとりたくなきものぞ　雅洞
また解散の修羅が始まる　洞人
博覧会景気にわける浪速っ子　人雅
登檣礼に陽炎のたつ　雅彦
花の昼シチューの焦ぐる匂ひして　彦雅
耳を傾け遠き囀り　雅人

昭和五十八年十一月十八日　首尾
於　俳句文学館

て参集。談笑裡にムード作りがあって句座に入る。関西からの春人先生から御挨拶の発句が示されれば、関東の時彦先生から客を迎える亭主の心くばりをみせた脇が付けられて、句座は一気に燃え立つ雰囲気を現出した。

張りつめた緊張感を秘めながら、なごやかな会話と豊富な話題の展開裡に、付合は楽しく進行した。流石に手練れ揃いである。治定された後の作句時間も短く、手早く付けられるのである。それは将に格に入って格にとらわれることなく、出るにまかせて、しかも格調の高い作品が、一句一句出来てゆくのである。その巧みさ素晴しさは、目を瞠るものがあり、感激で胸が一杯になった。

しみじみと年はとりたくなきものぞ
また解散の修羅が始まる
博覧会景気にわける浪速っ子
登檣礼に陽炎のたつ
花の昼シチューの焦ぐる匂ひして
耳を傾け遠き囀り

句座は一つの流れのリズムに乗り、巻き進められ、巻き終った後も、別れ難い愛惜の情を漂わせていた。

朴歯の下駄

杉内徒司捌

一月十七日の月熱海にみたり　郁
忘られし朴歯の下駄や寒の月　天
千鳥の声のかすかなる浜　あ
冬ざれに籬垣を結ふ男ゐて　あ
世間話に渋茶すゝめる　久
置床に古備前の壺ただ一つ　徒司
甚平姿のねまる気安さ　明雅
溪川に山女すくひて日を暮す　杉亭
家のめぐりに薪積み上げ　久美子
紅襷かけし娘ののぞき居り　あかり
歌垣のこる島のならはし　彬風
滾々と泉湧き出づ大花野　天留子
円空仏に詣る月影　郁子
ワープロに疲れて秋の雲を見る　天
誰が手かわびし雁の玉章　彬
サラ金の広告腹に市内バス　彬
「居酒屋兆治」江東劇場　郁
柔肌の花の刺青いさぎよき　杉
黙して過ぎぬ永き日和を　彬
　　あ

春おちば万葉の道うめつくし　郁
鬼の俎板たれの彫刻　天
調停の裁判母子別れさせ　あ
迷ひ雀が玻璃にぶつかり　久
煮凝りの箸を弾きてぶるぶると　彬
朝寝爛酒小原庄助　あ
寄り添ひつカメラに入る城下町　郁
ブルートレイン妻とはしゃぎて　同
レオタードパッドで騙す五十才　杉
袂の小銭そっとまさぐる　あ
玩具屋は怖ろし駄々をこねる月　彬
肥ゆる秋にも痩せ細る人　久
栂尾に鳥獣戯画の薄紅葉　あ
石をこすりて下る川舟　同
傘形の連判状の塵払ひ　杉
黒猫二匹友のあとから　久
花吹雪過去も未来も夢の中　天
蜂の巣を追ひ走る杣道　杉

昭和五十九年一月十八日　首尾
於小石川後楽園涵徳亭
連衆　東　明雅　杉江杉亭　副島久美子
　　中田あかり　馬場彬風　桜井天留子
　　森本郁子

馬場　彬風

正風を慕いて集う連衆、男女二十八名、四席に分れての猫蓑会三年目の初懐紙。この涵徳亭の窓辺の一席、寒梅か、綻ぶ庭を眺めやりながら、捌の発句を待つ。

忘られし朴歯の下駄や寒の月

何と金色夜叉である。実は徒司大人、昨夜熱海にて「今月今夜のこの月」を偲ばれし由、感懐未だ去りやらぬ面持であった。今日は四席見まわり助人の東先生、つり込まれてか、素早い脇、さすがは手練である。

次いで第三の転じ、一巡と順調にすべり出した。裏の半ば男共は年酒の酔もまわり、羽織、袴も脱ぎすてゝ聊かの羽目もはずしたか、名残の表の六句目では庄助ならぬ小原彬風さんと、女性の声もかかった。ともあれそこは、ベテランの徒司捌き、名残の裏の急の段で立て直し、さらりと品よく巻き終えた。

大成はもとより未だしとは云え前句の匂いを味い付ける付味のよさ、心と心の通い合う蕉風連俳のまことは、連衆の隅々まで浸み通ったように思われる。

熨斗柳

中島啓世捌

熨斗柳ほの揺るる間に初懐紙　啓世
女礼者の衣ずれの音　遊
薄氷の池にさざ波寄せてゐて　隆秀
下萠青む登校の道　和子
いくたびももとほりくればおぼろ月　弘子
コーヒーポット沸り立たせて　和
とつ国におもむく人の軽装よ　甲子郎
時計を見ずに顔をみつめる　遊
恋叶ふ神のおみくじ引きにけり　隆
尻尾切られた蜥蜴一匹　和
むくむくと入道雲の並び立ち　甲
登山電車でフニクリフニクラ　隆
幸福と云ふばら色の服を着て　遊
フルムーン旅行寒月のもと　弘
エレキバンたっぷり貼ってジャズダンス　和
テレビの音を大きめにして　弘
花に暮れ花に明けたるきのうきょう　甲
若鮎のぼる背耀らせつ　隆

春光にあはき錆あり古銅壺　和
あてにならない帰りの時間　遊
毎日が一喜一憂円相場　和
世はおしなべておしん辛棒　隆
輝の手をひた隠す客の前　弘
焼鳥の串山と積み上げ　遊
同窓会思ひ出せない恋もあり　弘
はんなり染まる紅の半衿　和
一襲ね兄貴譲りの紺絣　甲
苦さうに飲むバーボングラス　遊
月の座に般若心経誦して居り　隆
青磁の壺に投げ入れの郁子　遊
秋晴の今日しも村の運動会　隆
ちょっぴり足の出でし勘定　和
物書きの我はパソコンたのみにて　甲
風のたよりに聞きしことども　隆
奥美濃の淡墨の花尋めゐる人　遊
さえずりの声空に満ちゐて　啓
昭和五十九年一月十八日　首尾　和
於小石川後楽園涵徳亭　弘
連衆　雑賀遊　福井隆秀　式田和子
市野沢弘子　佐藤甲子郎　隆

福井　隆秀

正月のめでたい飾りものの熨斗柳が、晴着を纏った婦人たちの華やかな新年の挨拶や、衣摺れのざわめき、熱気のなかで微かに揺れている。

そんな情景を的確に捉えられた発句と脇で、啓世さん捌きの歌仙が進められてゆく。

一巡して裏のほぐれた気分になったところで、まず祝酒の盃をあげ、恋の句となる。

恋叶う神のおみくじに、尻尾切られた蜥蜴一匹。和子さんのこの付味は、転じがきいていて鮮かだと思う。叶うといっているのに、こうズバリ切られてみると、この句自体は嗔目の単なるスケッチにもかかわらず、前句と結びつけられると忽ち連句独得の物語咄や連想がそれこそ雲のように湧きあがってきて、さて連衆がつぎにどんな句を寄せ、捌きがどう捌かれるか、わくわくしてくる。まさに連句の醍醐味である。

幸福という薔薇色の服が出てきたり、円相場、バ！ボンなどとつぎつぎに展開して、奥美濃の淡墨の優美な匂いの花に囀りをもって首尾した。

西湖堤

秋元正江捌

枯芝に陽のうつくしき西湖堤（さいこてい）　正江
松の緑の透ける雪吊　みづゑ
受話機より街のざはめき聞こえきて　和代
珈琲まめを粗挽きにする　篤子
弦月を残し人影ビルに消ゆ　正雄
えび蟋蟀のひそむ戸袋（ウ）　美保
萩叢の庭をめぐらし独り住み　みき
開けるいとまももどかしき文　代
ロスのジョン、バリーのシャルルいずれかと　子
買物籠の中は納豆　雄
もの真似の鴉かあかあ啼いて過ぎ　ゑ
値上げを決める私鉄運賃　子
田草取る農夫に白き昼の月　き
蚯蚓またぎし山の教会　ゑ
クラス会カレッジソングふと忘れ　代
みんな揃ひて甘い物好き　雄
花の里絲紡ぐ技甦り　保
骨太障子春はうつろに　ゑ

錆（ナオ）び包丁入れて蛤つぶやける　雄
寝ぬ子をあやす母の後れ毛　代
初七日を過ぎてもうづく偏頭痛　同
本音建前くひ違ひつつ　保
凩のすりぬけてゆく旅の果て　雄
共に入れば柚子湯溢れぬ　子
唇づけの昨夜と異るアイシャドウ　ゑ
長編小説読み終るとき　保
神ともに在まして脊中痒くなる　子
桔梗・刈萱山は動かじ　同
かぐや姫月に向ひて帰りゆく　ゑ
新酒酌めどもほど遠き酔ひ　代
茶器（ナウ）択ぶべったら市のはづれにて　き
皂莢の実をゆらす少年　代
掌にのりて仔猫一匹もらはるる　き
陸橋のぼり霞む煙突　雄
呼び込みの本牧亭や花の雨　江
心より添ひ笑ふ長閑けさ　保

昭和五十九年一月十八日　首尾
於　小石川後楽園涵徳亭
連衆　山口みづゑ　歌川和代　穴沢篤子
氏原正雄　高瀬美保　秀島みき

高瀬　美保

くじ運良く独立した小部屋に当り席を設けたCグループの七人、後楽園の冬の庭のたたずまいを吟じられた正江さんの端正な起句から、「街のざわめき」「珈琲まめ」と若やいだ感じの表六句と進行、一巡の後乾盃をする。

裏に入り、「開けるいとまももどかしき文」と、やや古風な恋を「ロスのジョン……」と転じる軽妙さ、すぐ日常的な「買物籠の中は納豆」へと変化する自在さ、一年生の私はただ成程！さすが！と感じ入るばかり。

裏から名残の表にかけては、「骨太障子…」「錆包丁……」「寝ぬ児をあやす……」「初七日も」とそれぞれに味わい深い句が並び快調な運び、そして「凩の」から「柚子湯の中の」のしっとりした恋句への転じとなり、一巻の中で盛りあがりを見せたのではないだろうか。自身の事で恐縮だが、「本音建前くひ違ひつつ」をポケットから拾っていただき、当意即妙の付け味の面白さに、所を得て始めてその句が生きる連句の妙味と言うものを、改めて教えられたように思った。

港（ナオ）には巨き船来て春の潮　麻
ゆっくりと飲むブルーマウンテン　夷
「ぴあ」を手にスピルバーグを語りおり　孝

速水　昌子

広々とした庭の様子と、松の見事な雪吊りを賞でて「冬霞」を巻いた温かで長閑な昨日に比べて、今朝のこの大雪。

あの雪吊りはやはり飾りだけではなく、立派に役に立っているにちがいない。とろりとした蝋梅の花も、うつむいて震えながら、大丈夫、大丈夫と耐えていることだろう。

吉野秀雄の歌は、われ死なば靴磨きせんと妻はいふ　どうかその節は磨かせ下され

からきております。

さて、この巻の山場は、はっとする驚きや美しさを持てただろうか。匂いの花に、仲睦じい両陛下が詠まれて、後半の沈んだ気分をめでたくひき上げることとなった。

ウラ6「奪衣婆」の句は、場の句か、他の句か、はては自の句かと、にぎやかに笑っていた時の楽しさは、座の文芸ならではのものであった。

冬霞

大窪瑞枝捌

大庭の松よりなびく冬霞　瑞枝
二羽の鶏のとまる雪吊　貞子
楮打つひびきも寒く篭りゐて　孝子
かくれん坊をさがす声する　昌子
おのが影踏みて良夜を帰る人　淳子
コスモス揺れるここもあそこも　麻子
新蕎麦（ウ）の猪口もせいろも民芸調　東夷
商社づとめをいさぎよくやめ　孝
「黒船屋の女」と云はれ猫いだく　貞
「ノオ」の返事はひとつ息して　昌
貸すもいや借りるもいやと金のこと　麻
帷子の衿ぬきし奪衣婆　貞
肝臓（きも）煮込み焼酎肌の夏の月　夷
無骨な腕に笑ふ嬰児　昌
塗りたての回転木馬上下して　孝
万愚節にはいつもかつがれ　麻
毛氈に散る花よけて通されぬ　貞
むささびの仔の生れし裏山　昌

昭和五十九年一月十八日　首尾
於　小石川後楽園涵徳亭
連衆　米谷貞子　坂本孝子　速水昌子
上月淳子　内田麻子　馬場東夷

絶頂の城

付勝練習歌仙

東　明雅

投句〆切
4月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな　蕪村
夏鶯のこだまする溪　正江
枕蚊帳熟睡の夢の安からん　欅晴
四句目
治定　啜る番茶に茶柱の立つ　東夷
次位　紅茶になごむ午后のひとときみき
佳作　エプロンをかけ夕仕度する　昭代
厨の母のまとふ味噌の香　孝子
仕立物など広げ始める　千町
綻びを縫ふ針目こまかく　正江
針運びゆく袖の鉤裂　欅晴
クレヨンそっと箱に片づけ　貞子
そっとかたしぬ泥のお団子　あかり
溜りし写真アルバムに貼る　明声
校正終へて染みし指見る　和子
組立終へてレゴのロケット　彬風
千代紙の舟とりどりに折り　隆秀
切る度変る飴の目と鼻　天留子
双子兄弟同じ眉して　麻子

※治定の句ほどの具体性がないし、「午后のひとときに」が次の月を制限している。

その点では佳作の「エプロンをかけ」・「厨の母の」など、いずれも軽い四句目ぶりであり、台所仕事のお母さんを髣髴とさせ、ともによく付いている。付味がよい。

さらに、子供が寝たのを幸いに針仕事をするお母さんも幾人か居られる。これもまことに素直な着想である。「仕立物など」の軽さ、「綻びを縫ふ」・「針運びゆく」の句など、それぞれにおもしろい。

片づけものをするお母さん、「クレヨンそっと」・「そっとかたしぬ」など、それぞれ子供の寝息をたしかめながら、子供の出しちらしたものをそっと片付けるよいお母さんが瞼に浮かんで来る。

さらに子供が寝たのを幸いに仕事をするお母さん、アルバムを貼ったり、校正を終ったり、ロケットを組立てたり、千代紙を折ったり、飴を切ったり、なかなか忙しい。それぞれに付心はよく分かるのであるが、付味となると今一歩のものが多い。

さらに、熟睡の子の其人の付けを試みた方があったが、

眉のあたりが父に似かよひ　昌子
パートの妻のはや帰り来し　力
肩書捨てて余生楽しく　たかし
だまし舟折る広き縁側　峰彦
ふり向けばただ透明な風　蓼艸
隙入る風を少な目にして　哲
浮世絵壁に止めて贋作　黄夜
上がり框に子の脱ぎし靴　杉亭
ビルの住居に勝手口なし　誠一
提灯箱の紋の菊水　あさひ
宅急便はまこと迅速　雪彦
為す事すべてうまく運びて　美保
透徹りたる幼児の爪　遊
くはへ煙草のけむり目にしみ　正雄

治定の句は、やっと子供を寝かしつけた人（母親と見るのが最も自然）が、ほっとして番茶を啜っている状態と見てよい。これは人情自の句で、熟睡の子に対する向付の形になっている。番茶を啜るというのは、世間で最もありふれた、それだけに軽い句であるが、その番茶に茶柱が立ったというところが、縁起のよい前兆として、子供が安心して眠っているのを見て満足した母の気持と通い合い、よい付味となって、次の月の句もこれなら付けやすい。

次位も同じくお茶を飲んでいる風景であり、「紅茶になごむ」が「夢の安からん」とよい付味になっているが、※それも付方としては悪くない。「双子兄弟」・「眉のあたりが」の両句がそれであり、他の会釈の句である。

「パートの妻」は、妻の留守に子供を寝かしつけた夫が、妻が帰って一安堵するさまと見ればよく分かるし、「肩書捨てて」は社会的にえらかった人が停年か何かで職を退き、今は好々爺にかえって、昼寝の孫を見入っている所とすれば、付心も分かり、付味も悪くない。

次の「ふり向けば」と「隙入る風」とは、ともに風を取り上げている。「ふり向けば」は表現が近代的である。「隙入る風」は、あまりそのものずばりと言っていて、もすこし、ねらい所も表現も一工夫して欲しかった。

「浮世絵壁に」は、熟睡する子の部屋の飾りであろうか。人情が薄い上に、付味もあまりよくない。「上がり框に」・「ビルの住居に」・「提灯箱の」の三句は人情が薄い。これでは、前句一句だけで人情の句をすてることになる。連句のおもしろさは人間の生活・動作・言語・思考・感情など、ともかく人間的なもの（これを人情という）を表現することにあるのだから、人情の句が出たら、これを一句ですてないで、すくなくともう一句は人情の句を続けるのがよいと言われている。

次の五句目は月の定座であるから、当然月の句、それも秋の月を詠むのが一番よい。場の句（人情なし）でも絶対悪いのではないが、縞模様になりかかっているので、人情の句とした方がよい。人情の句は打越が他であるから、自の句か自他半にすべきである。

春立つ

明雅捌

立春の豆腐の水をこぼしけり　正江
路地のかしこに未だ残る雪　隆秀
ビルの窓陽炎ふあたり人見えて　啓世
銀盆ささげ運ぶコーヒー　和子
まろやかな月も傾く頃となる　一青子
二段ベッドに飾る草花・　彬風
日記書く蟋蟀の声室に充ち　千町
君待ち明かす橋姫の髪　李花子
紫の横笛袋形見にて　和
小豆の粥を食べ終る時　正
旗立てて稲荷の祭賑やかに　彬
そちらの壁はペンキ塗り立て　李
月明し馬車でローマの石畳　千
故郷しのび濁酒のむ　隆
櫨紅葉人憎む日も恋ふる日も　宏
小櫛荒櫛本黄楊の櫛　和
ネクタイにカレーの染みの花曇り　宏
新入社員早稲田出なりと　彬

雲雀鳴き球なくなりし草野球　隆
ゲートボールは隅っこでする　和
鋭角の岬たづねてローカル線　正
本美濃紙の干されゐる村　啓
うづくまる猫が囲炉裡であくびして　隆
肺活量も減りし老農　宏
原発の賛成反対半ばなり　彬
途方もないことしかねない夜　千
極楽へ行けると坊主たらし込み　隆
団子の焼けるにほひ香ばし　一
芥にも塵にも月は照り渡り　和
牧を閉ざして嶺々のしづまる　正
脱サラの爪弾くギター爽やかに　彬
評判悪しきマンションの人　啓
自転車に春の卵をのせて行く　正
剪定いそぐ鉄とぎをり　李
山門を濡らすひそかな花の雨　雅
仔犬ころころ育つうららか　一

昭和五十九年二月四日　首尾

「連句教室」於関口芭蕉庵

東　明雅

この歌仙は校合の際、ほとんど筆を加えたり変えたりしなかった。こんなことは稀である。そして、これは作品が自然で無理がないことを証明するものである。

ただ、一箇所、ウラ四句目の「小豆の粥を食べ終る時」は、原句では、「氷小豆を食べ終る時」であった。打越も前句もともに優美な古典的な句であったから、わざと現代的・庶民的な「氷小豆」を反射的に採ったのだが、やはり付味が気になった。この一巻は全体におとなしいけれども、そのおとなしい中にも変化は十分にあり、ことさら前句の紫の「横笛袋」に、「氷小豆」の不協和音をひびかせることもない。考えてみると、紫と言っても古代紫は小豆色がかっている。それで作者はこの句を思い付かれたのだろう。小豆はその意味で前句にすごく付味がよい。それで氷小豆を小豆粥にかえさせていただき、私としてはこれで十分に落ちついたと思うがいかがであろう。

雁帛往来

▽馬場彬風家では「家庭連句」と称し家族そろって「三つ物」に興じられているが、そのほほえましい作品をすこし紹介する。

昭和五十八年十二月一日(木)

おじいちゃん　(七才)　秀明
　べんきょうするよ　がんばるぞ
　よしよしえらい　さすがオニイだ　祖父
クリスマス　祖母
　サンタクロースが　わらってる

昭和五十八年十二月十七日(土)

おかあさん　秀明
　れんくだめだネ　わかってない
　そうよやさしく　秀がおしえて　母
ストーブで　祖父
　ねこがわらって　くしゃみする

二月一日　(水)晴

にゃーにゃーと　(五才)まき
　かわいいミーがゆきの上(五才)さち
ともだちできて　ふゆのよあそび　祖父
あけのそら　祖母
　月がまっしろ　さむそうに

▽「俳諧師」に関する好二編を得たが、「俳諧師」の肩書をつけた名刺を使われていた者が、現在も二名いる事を御存知でしょうか。第一号は明雅主宰であり、第二号は鈴木春山洞氏(12頁参照)だが、他にもあれば、何年頃から使われている等の短い説明をつけてその名刺の御恵送を乞いたい。

▼連句実作の際つきあたるいろいろの疑問に答えてくれる欄をつくってくれませんか。抽象論ではなく、実作本位の「質疑応答」欄があればとても助かります。(東京都　福井隆秀)

▽11頁にそれらしき「解説」がありますが、早速次号から実現させましょう。但し紙数の関係上余り沢山の希望には応じかねるかも知れません。

連句会案内

。A・C・Cゼミナール
日時　第二・四水曜午後一時ー三時
会場　新宿住友ビル四十八階
　朝日カルチャアセンター
　新宿区西新宿二ノ六ノ一
(電)三四四ー一九四一(代表)
入会金　五千円
受講料　一万一千四百円(三ヶ月)
　二万二千円(六ヶ月)

。連句教室　会費千円
日時　第一日曜日午後一時ー五時
会場　関口芭蕉庵
　文京区関口二ノ十一ノ三
(電)九四一ー一一四五

季刊「連句」第四号　定価五百円
誌代　年二千円(送共)
発行　昭和五十九年三月一日
編集人　杉内徒司
発行人　東明雅
〒277
季刊「連句」発行所
柏市つくしが丘二ノ二ノ一二
電話〇四七一ー七五ー一一九二
振替口座東京七ー五二一三三